

県研究主題

心と体を一体としてとらえ、児童一人ひとりが生涯にわたって運動に親しみ、自らの健康・体力づくりを考えて行動する資質や能力の基礎を培う学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 三橋 正人（県央地区）

<研究主題>

児童の思考・判断を大切にした授業づくり — ボールけりゲームの学習を通して —

1 提案内容

児童の体育における思考力・判断力を向上させることで、児童がより運動を好きになり、生涯にわたって運動に主体的に関わろうとする資質を、低学年の段階から育てていくことができるのではないかと考え、ボールけりゲームの学習を通して、児童の思考・判断を大切にした授業づくりを行った。

(1) ゲーム領域における「友達のよい動きを見付ける」活動

よい結果につながった動きの良さを見付けることは、児童の技能の習得につながる。そのため、ゲームの際に友達のよい動きを見付けるための時間を設けた。

(2) 「前提の知識」の習得

児童の思考力・判断力を向上させるためには、運動の行い方について知ることが必要不可欠と考え、児童がどのような動きが「よい動き」なのかを具体的に共有できるように、単元のオリエンテーションや授業のはじめに、掲示物・映像等を活用して理解できるようにした。

(3) 知識を基にした対話的な学び

的当てゲームでは、的に当てるためにどうしたら真っすぐにボールを蹴られるか、どこに移動したらシュートをしやすいかを、話し合う時間を設けた。また、教員との対話から「もっとこうしたい」「どうすればいいかな」というように、考えながら運動できるようにした。

(4) 用具・場・学習用具の工夫

用具の工夫として、ボールは低学年でも扱いやすいソフトフットサルボールを使用した。空気圧を低くして弾まなくすることで、ボールが遠くへ飛びすぎないようにした。

場の工夫では、ボールが的に当たる楽しさを味わえるようにするために、児童の実態に合わせてボールを蹴る位置からのまでの距離を何度か調節した。

学習カードは、友達のよい動きを簡潔に書けるようにした。ゲームを見る時間と学習カードを書く時間に分けたことで落ち着いて見取り、書くことができた。

(5) 「運動についての思考・判断」の評価方法

教員が思考・判断の学習評価を的確に進めるためには、指導の目標及び内容に対応した評価規準を作成することや評価方法を工夫することが大切になる。そのため、授業を行う前に、評価規準に基づく「児童の具体的な姿」とその支援の具体的な手立てを設定した。

2 協議内容（提案者と参加者による質疑応答、グループ協議）

（1） 友達のよい動きを見付ける活動について

小学校学習指導要領解説におけるゲーム領域の思考・判断では、「ボールゲームや鬼遊びの動き方を知り、攻め方を見付けること」とあるが、本研究ではなぜ「友達のよい動きを見付けること」にこだわったのか。

- ・攻め方を見付けるために、友達のよい動きを見付け、自分で思考・判断するということが大切であると考えた。
- ・ゲーム領域においても、チーム全体の動きに目を向けるようにしたり、守りの人数を少なくして効果的な攻めができる場面を増やしたりするなどの工夫をすることで、友達のよい動きを見付ける学習は実現できる。
 - ・低学年でよい動きを見付けることは、中・高学年の「作戦を立てる」能力につながる。思考・判断について系統性をもって指導することができる。

（2） 教師が意識することで児童は変わる

- ① 全員が体育の授業に楽しんで取り組み、達成感を味わえるようにするためには、用具や指導の工夫はとても大切である。
- ② 児童がよい動きについて、共通理解をすることが大切である。今回は、オリエンテーションや掲示物、映像を活用したことで、よい動きを共有できていたと思う。

（3） 学習評価について

学習カードの記載内容には、文章を書く力が大きく影響する。特に学習カードに書くことが苦手な児童へはどのような配慮をしたか。

- ・書くことが苦手な児童からは、考えたことなどを聞き取り、学習カードに書けるように支援した。また、よい動きに関わる単語を書いている場合は、それを評価して、次回によりよく表現できるように促した。
- ・学習カードにより動きのポイントを載せておき、児童がそこから選べるようにする方法も考えられる。

（4） 児童の関わり合いについて

- ① 見合う活動を設定していることがよかった。他の領域でも生かして行くのではないかな。
- ② よい動きを伝え合う活動を取り入れていくことも大切である。
- ③ 友達とよい動きを見合うことは大切だが、そこを目的とせず、自分の動きとつなげて考えることが大切である。

3 まとめ

（1） 学級経営が体育の授業につながっている

教員が児童の「もっと〜」という思いを大切にしたい具体的な指導の手立てが必要である。児童の実態に応じた用具や場を準備し、児童の中からよい動きのポイントを見付け、全体で共有していくことが大切である。

（2） 友達のよい動きを見付けることについて

「なぜ」「だれが」「いつ」「どこで」見せるのか、見るのかということをよく考える必要がある。「見よう」と漠然と指示するのではなく、目的を児童と共有し、児童が見取り方を理解することで、運動と見取りのどちらも意味ある時間とすることができる。

<研究主題>

体育科、保健体育科におけるカリキュラムマネジメントの確立

1 提案内容

児童への意識調査から、本校は高学年になるに連れて体育学習への意欲が低下する傾向があることが分かった。また、児童には「自分の動きを自分で見直したい」「友達と教え合いたい」「めあてを持って学習したい」などの願いがあることも分かったことから、児童の意欲の持続や向上のために、「教え合いや学び合いが行いやすい場を意図的に設定すること」「主体的な課題解決を取り入れること」に焦点化し、学校全体で実践した。

2 協議内容（提案者と参加者による質疑応答、グループ協議）

(1) 学習の進め方について

① 単元全体の計画について

児童自身が自分の到達度を把握した後に、学級全体で「跳び箱運動で大切にしたいこと」を確認し、児童自身が課題を設定して取り組んだ。

② 資料を提示する方法やタイミングについて

児童が取り組む課題を設定した後に、資料の使い方等を教師が提示した。

③ 3人グループにした意図について

2人では技能差がある際に助言しにくく、4人では1人当たりの運動量が減ってしまうと考え、3人グループとした。

(2) 実践についての職員間の共有の仕方について

具体的にはどのような方法を用いているのか。

→ 校内研究の時間以外にも、日頃から教員同士が悩みを相談し合って自主研修をしたり、作った資料をネットワーク上に保存して周知したりしている。

3 まとめ

本提案は、スモールステップの場をつくり、学び合いを活発にするためにグループでICTを活用して見合いを行っていたが、多くの調査を基にして児童の体育への意欲低下の実態を掴み、指導の手立てを講じていた点がよかった。

授業では、児童がカードや映像を活用しながら、自分達の技能の高まりを感じて喜ぶなど、グループでの肯定的な関わりがあった。ICT機器の操作も、巧みに効果的に行うことができていた。単元の導入における「どのように学ぶのか」という指導によるものであると考える。

技のポイントが示されたカードで「何を、どのように学ぶのか」を見える化することで、児童は自分のめあてをイメージとして「分かる」ことができる。また「教え合いの仕方」や「学習のつなげ方」の資料は、他の領域や教科においても活用できる、汎用的な能力・資質の育成につながるものである。

ICTの活用は、本実践のように「何を、どのように学ぶのか」「身に付けるべき資質・能力」を学校として検討し、教育課程に位置付けることで、効果的に使用することができる教科・領域を増やしていくことができる。

全体協議

<協議の柱>

「確かな学力」を育成する年間指導計画及び評価計画の工夫・改善
体育科における思考力、判断力、表現力等を育む学習活動と指導の在り方

1 協議内容

平成32年度より全面実施となる新しい学習指導要領の解説に示された内容を、7領域に分けて確認し、現行の学習指導要領からの変更点や、今後の実践方法について検討した。特に、育成を目指す三つの資質・能力のうち「思考力、判断力、表現力等」を育成するための学習活動や指導の在り方について話し合いが行われた。

(1) これまでの取組を生かせる点

体づくり運動系・器械運動系・陸上運動系・ボール運動系では、1回の試技を客観的に見直したり、見本と自分の動きを見比べたりすることができる手立てを用意すると、自分の課題を見付けたり、友達に具体的なアドバイスをしたりすることがしやすくなるという考えが述べられた。その点では、今回の提案にあったようなICTの活用や学習カード等の資料の提示は、有効な手立てであると言える。

(2) 今後の取組に工夫が求められる点

水泳運動系では、児童同士が互いの動きを見合う場づくりが難しいという点が挙げられた。また、表現運動系では、「よい動き」と考えるものについて共通理解を明確にすることが大切であるという点、保健では、新たに示された「技能」などの評価について検討が必要であるという点が挙げられた。

2 まとめ

新しい学習指導要領に示される「思考力、判断力、表現力等」について、各学年、各領域においてどのような力を育成するのかは、「知識及び技能」や「学びに向かう力、人間性等」との関連も把握しながら検討する必要がある。

「学びに向かう力、人間性等」においては、中学年から「共生」の視点が新しく加わり、「友達の考えを認めること」や「仲間の考えや取組を認めること」が示された。これは、「思考力、判断力、表現力等」の中の「考えたことを他者に伝える」ことに関連して指導することができると思われる。

また、運動が苦手な児童や運動に意欲的でない児童への指導等の在り方について、種目毎に「知識及び技能」「学びに向かう力、人間性等」の内容に「配慮の例」が具体的に示されていることに注目していただきたい。

平成32年度の学習指導要領の全面実施に向け、来年度から小学校は移行期となる。今年度は新しい情報について収集を進めながらも、現行の学習指導要領を着実に実施していただきたい。